

献呈の辞

河 内 隆 史

浅生重機先生は、2011年12月に、そして、河邊義正先生は、2012年1月に、めでたく古希をお迎えになられました。ここに古希記念論文集を献呈させていただくにあたり、明治大学法科大学院長として一言申し上げたいと存じます。

浅生重機先生のこと

浅生重機先生は、2007年4月に明治大学法科大学院に専任教授として着任され、「民事訴訟法」、「民事執行・保全法」、「民事訴訟法演習」、「要件事実・事実認定論」など、民事訴訟法の分野を中心として、講義や演習科目を担当されてこられました。

先生は長年裁判官を務められ、日産自動車男女差別定年制の無効を認めた東京高裁判決、貸金業者の取引履歴開示義務を認めた東京高裁判決など、主として民事裁判に関わってこられました。この間、法務省法制審議会の幹事や強制執行制度部会委員を務められましたし、同時に、民事執行法関係を中心に著書や論文で多くの優れた研究成果を発表されています。先生は、2006年12月に横浜地方裁判所所長を最後として定年退官されましたが、退官後も弁護士として活躍されるとともに、川崎市市民オンブズマンとして、市政の監視や市民の権利利益の保護に尽力されておられます。

そして、先生は、このような豊富な実務経験と研究成果を法科大学院の教育のために存分に注がれておられます。とりわけ、先生が提案されて、新たに設置された「要件事実・事実認定論」は、法科大学院教育が目指す理論と実務の架橋をまさに体現したものといえ、多くの学生がこの授業を通して民事法の神

髓を習得できたものと思われます。本法科大学院に着任されるまでは、教壇に立った経験がなく、どうやってよいか、なかなか頭を悩ましたと、温厚な口調で淡々と語られておりましたが、端から見ていると、とてもそのようには感じられませんでした。当然のことながら、教える法律科目の内容には十分習熟されておられるので、法科大学院生の知識レベルや理解力をつかむのに苦勞されたのかなという印象を持ちました。しかし、先生は、ここでもひとかたならぬ情熱をもって、真摯に教育に取り組まれ、多くの学生を導いてくださいました。前述した「要件事実・事実認定論」は、そのような先生の教育体験の中から生み出された結晶と申すべきものでしょう。また本法科大学院内の実務教育を考える会においても、いろいろと貴重なお提言をいただき、実務教育の充実強化につなげることができました。

古希というにはふさわしくない、心身ともに若々しい淺生重機先生は、教育者として今將に脂がのってきたところでしょう。先生を失うことは、發展途上の本法科大学院にとって、大きな損失ですが、ご退職される一つの区切りとして、明治大学法科大学院教員を代表して、先生のこれまでのご貢献に感謝申し上げるとともに、先生の今後のますますのご健勝とご活躍を祈念しつつ、祈念論文集を獻呈させていただきます。

河邊義正先生のこと

河邊義正先生は、2010年4月に明治大学法科大学院特任教授に着任され、模擬裁判・法文書作成（刑事）、刑法展開演習、刑事訴訟法演習などの刑事法の分野について、講義や演習科目を担当されました。

先生は長年裁判官を務められ、リクルート事件NTTルート・文部省ルート第1審判決、坂本弁護士一家殺害事件控訴審判決、薬害エイズ事件厚生省ルート控訴審判決など、主として刑事裁判に関わってこられました。この間、法務省法制審議会幹事や刑事法部会委員、司法研修所教官、新旧司法試験考査委員などを務められました。先生は、2007年1月に東京高等裁判所判事部総括を最後として定年退官されました。退官後も弁護士として活躍されるとともに、

献呈の辞

同年4月から、桐蔭横浜大学大学院法務研究科教授として、法科大学院教育にこの制度のスタート時から携わってこられました。

法科大学院教育は、長年、大学教育に携わってきたものにとっても、なかなか対応の難しいものでした。先生は、裁判官としての豊富な実務経験とともに、司法研修所教官のご経験もあり、法科大学院教育の目指す理論と実務の架橋についても、高い見識に基づいて、さらなる多くの工夫を重ねてこられたものと拝察します。

本法科大学院においても、情熱をもって教育に取り組まれており、授業時間外にも熱心に多くの学生と質疑されているお姿を拝見しております。熱く語る先生のご指導は、学生たちを勇気づけてくれていると思います。また法科大学院教授会や実務教育を考える会においても、いろいろと貴重なご提言をいただき、実務教育の充実強化や制度の改善につなげることができました。あいにく刑事法分野にも実務にも疎いものですから、いろいろな場でお話しさせていただき、非常に多くのことを勉強させていただきました。

古希というにはふさわしくない、お姿を拝見しても、お話をうかがっても、若々しい河邊義正先生であり、先生を失うことは、発展途上の本法科大学院にとって、大きな損失ですが、ご退職される一つの区切りとして、明治大学法科大学院教員を代表して、先生のこれまでのご貢献に感謝申し上げるとともに、先生の今後のますますのご健勝とご活躍を祈念しつつ、祈念論文集を献呈させていただきます。